

# ビュルヌフと仏教研究の誕生

著者	ロペス ドナルド S, 高橋 原
雑誌名	近代と仏教
巻	41
ページ	19-26
発行年	2012-03-16
その他のタイトル	Burnouf and the Birth of Buddhist Studies
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00002292">http://doi.org/10.15055/00002292</a>

## ビュルヌフと仏教研究の誕生

ドナルド・S・ロペス（高橋 原 訳）

ヨーロッパと仏教の出会いを説明する際に、古典的史料の中で仏教がわずかに言及されている例を紹介することから始めるのが慣例となっている。「インド人の中には仏陀 Boutta の教えを信奉する人々があり、彼はその並外れた神聖さゆえに神とあがめられている」というアレクサンドリアのクレメンスによる記述。マルコ・ポーロによる、簡潔でありながら驚くほど忠実な、サガモニ・ボルカン（Sagamoni Borcan）の生涯の記述。そして、フランシスコ・ザビエルが日本で、マテオ・リッチが中国で、それぞれ残した仏教への否定的コメント。しかしながら、イエズス会の枢機卿アンリ・ドゥ・リュバック（Henri de Lubac, 1896-1991）が「科学的発見（la découverte scientifique）」と呼んだような仏教の学術的研究は、ようやく19世紀になって始まったというのがほぼ定説となっている。それを代表する巨人がウージェーヌ・ビュルヌフ（Eugène Burnouf, 1801-1852）である。彼はこの分野創設の父であると見なされている。少なくとも私はそう信じている。本日のこの発表で、私は、なぜそれが正しいのか、そして一世紀半も前に死んだ一人の人物によって書かれた本が、どのようにして、今日の我々の仕事にひそかな影響を与え続けているのかを論じてみたい。

まず彼の生涯を簡単に、少なくとも1844年まで追ってみたい。1801年パリ生まれ。父は著名な古典学者でタキトゥスの翻訳者でもあったジャン＝ルイ・ビュルヌフ（Jean-Louis Burnouf, 1775-1844）。ビュルヌフ（父）は東インド会社で船長をしていたスコットランド人、アレクサンダー・ハミルトンのもとでサンスクリットを学んだフランス人学者の第一世代に属していた。ハミルトンは、ナポレオンが1803年にアミアン条約を破棄した際に、（18～60才の英国人男性1180人とともに）フランスで捕らえられていたのである。ビュルヌフ（子）は、ギリシャ語、ラテン語とともにサンスクリットを父から教えられ、後にアントワヌ・レオナルド・ド・シェジー（Antoine Léonard de Chézy, 1773-1832）とともにサンスクリット研究を続け、コレージュ・ド・フランスにサンスクリット語および文学の講座が設置されると最初の教授に就任した。

1837年4月20日前後に、サンスクリットの仏教経典写本24巻がパリに到着した。これはネパール王室駐在イギリス公使助手ブライアン・ホートン・ホジソン（Brian Houghton Hodgson, 1800 or 1801-1894）がその7ヶ月前に発送したものであった。1837年7月5日に、ビュルヌフはホジソン宛に、アジア協会からの指示でウージェーヌ・ジャケ（Eugène Jaquet, 1811-1838）とともに経典の調査にあたることになったと書いている。彼らは二人で担当箇所を分担して読み始めた。ビュルヌフは当初、最初に取り組んだ『八千頌般若経（Aṣṭasahasrikāprajñāpāramitā）』にげんなりしたという。「というのは、読んでも読んでも、

般若波羅蜜多を獲得した者に約束される利益と功德の繰り返しだったからである。だが、そもそも般若とは何なのか。それはどこにも書かれていなかったが、私が知りたいのはそれであった」<sup>1</sup>。彼は読解を続けた。

私は別の書に向かいました。九法宝典（nine dharma）のうちの一つ、法華經（Saddharmapuṇḍarīka）です。これがよい選択であったことは確かです。4月25日以来、私は大学とアカデミーの仕事の合間をぬって許される限りすべての時間をこの經典に割き、すでになんかの部分を読み終えました。全部が理解できたわけではありませんが、それは驚くにあたりません。内容も文体も見慣れないものですから。しかし私はペンを片手に、*Asiatic Researches of London and Calcutta* と、プリンセプ<sup>2</sup>の紀要（*The Journal of the Asiatic Society of Bengal*）に載った、あなたのすぐれた覚書を読み直そうと考えています。まだまだ私の目にはよくわからないことが多いのですが、それでもこの書物の展開や著者の説明の仕方は理解できています。しかもすでに2章は完全に、すみずみまで翻訳を済ませました。これらは二つの寓話ですが、内容も面白く、仏教の教えの伝え方と、推論的でまさにソクラテス的な説明法を示す、きわめて興味深い見本となっています……。正直なところ今、私はこの読解作業にとりつかれており、もっと時間と元気があればと昼も夜もかかりきりになれるのと思っています。もっとも、かなりの部分を抜粋、翻訳してしまうまでは法華經の前を離れないつもりです。あなたの寛大なお寄贈に正当に報いるには、私どもにかくも気前よく寄越してくださった宝の山の、たとえ一部なりとも、ヨーロッパの学者達に伝えていく以外にないということを確認しているからです。冬までは身体に鞭打ち、ドイツで出版社を見つけて『法華經の分析あるいは考察』を出版したいと考えております<sup>3</sup>。

この法華經の「分析」あるいは「考察」は、以後7年間にわたって進展を続けることになる。1841年10月28日のホジソン宛書簡で、ビュルヌフは法華經の翻訳の印刷が済んだと報告し、「しかし私は、この風変わりな作品に序文を付したいと考えております」<sup>4</sup>と書いている。この本は、7年後の1844年に『インド仏教史序説』という控えめな題名がつけられて出版されることになった。

ビュルヌフ訳の法華經は彼の生前には出版されなかった。彼が出版を遅らせたのは、概説書がなければヨーロッパの読者には理解されないと感じていたからであった。それは647頁の大部となった。より正確に言うならば、タイトルページに「第1巻」と記されて

<sup>1</sup> Léon Feer, *Papiers d'Eugène Burnouf conservés à la Bibliothèque Nationale* (Paris: H. Champion, 1899), pp. 157–158.

<sup>2</sup> 【訳注】 James Prinsep (1799–1840)。アジア協会書記として1832年に同協会ベンガル支部紀要を創刊。

<sup>3</sup> Op. cit., pp. 158–159. For a very useful study of Burnouf's work on the Saddharmapuṇḍarīka, see Akira Yuyama, *Eugène Burnouf: The Background of His Research into the Lotus Sutra* (Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, 2000).

<sup>4</sup> Léon Feer, op. cit., p. 174.

いる通り、ビュルヌフはこの本を序説の最初の巻として構想していたのであった。ビュルヌフの説明するところでは、少なくともあと1巻、できればさらに3巻を書くつもりでいたという。第1巻はネパールにサンスクリットで伝えられていた仏教文献にあてられている。第2巻は5部からなり、スリランカのパーリ語文献にあてられる予定であった。この研究に続き、ネパールのサンスクリット文献群とスリランカのパーリ語文献の比較考察の巻が加えられるはずであった。最後の巻は6部からなる考察で、仏陀入滅時期に関するさまざまな伝承の分析、仏陀入滅後のインド仏教の運命や、インドからアジア諸地域に仏教が伝播した各時代の検討が行われるはずであった。ビュルヌフは第1巻の中で繰り返し、いずれ行なうこれらの諸考察に言及しており、彼が本気でそれを全部やり遂げようとしていたことがわかる。このことは彼の死後にたくさんの翻訳されたパーリ語テキストが発見されたことから確かめられる。

ビュルヌフの生前に出た唯一の仏教に関する本が、1844年パリで出版された『インド仏教史序説』であった。この本は仏教を扱ったものとして、ヨーロッパで最初の学術的モノグラフである。これに先立つ例外として、アベル＝レミュザ（Abel-Rémusat, 1788-1832）が法頭の『仏国記』を多くの注釈をつけて翻訳したものがあるものの、これは重要な業績ながらほぼ忘れられたものとなっている。それでもビュルヌフの本は、法華経の翻訳以前に彼が書こうとしていた他の著作と同様に、彼の仏教観を雄弁に語るものとなっている。その仏教観は今日の我々にまで引き継がれているものである。このシンポジウムの中心問題——モダニティと仏教の問題——に対するビュルヌフの貢献を検討するにあたって、彼の貢献をいずれも「化（ization）」という接尾辞を持つ四つの見出しのもとに分類してみたい。インド化（Indianization）、サンスクリット化（Sanskritization）、テキスト化（Textualization）、人間化（Humanization）である。

## インド化

647頁からなる『序説』の第3センテンスにおいて、ビュルヌフは宣言する。「その創始者の名にちなんで仏教と呼ばれている信仰（ビリーフ）は、まったくインド的である」。フランス語ではさらにいっそう強調され、彼は仏教を「徹頭徹尾インド的な事実」と呼んでいる。ある意味で、この発言は今日ではあまりに明白なことで、わざわざ指摘するまでもない。しかしつい一昔前までは、仏陀を起源に据えることに多くの議論があり、エジプト起源説を唱える論者が多かった。周知の通り、仏教は何世紀も前にインドから消え去っており、ビュルヌフ以前のヨーロッパ人はインドにおける仏教の知識を主としてバラモン達から得ていた。彼らは、時に称賛を、また時に軽蔑をこめて、仏陀はヴィシュヌの9番目の生まれ変わりであると語っていた。インドの石窟寺院で仏像群が確認されており、それらから、ウィリアム・アースキン（William Erskine, 1773-1852）のような人物達が仏陀の教えについての推論を行っていた。したがって、ビュルヌフは、仏教がまったくインド的であると宣言することで、仏陀と彼の教えの起源について何世紀ものあいだ流布していたおかしな理論を駆逐しようとしていたのである。

しかしビュルヌフは単に仏教がインドに起こったと言ったわけではなかった。より強く、

仏教は「徹頭徹尾インド的事実である」と述べたのであった。『序説』の刊行時にはすでに、ビュルヌフは大部の『バーガヴァタ・プラーナ (Bhagavata Purāṇa)』の翻訳を了えており、インドの古典について知悉していた。ビュルヌフにとって、仏教はこれらの文献——その哲学と宗教——とそれを生み出した文化というコンテキストにおいてはじめて理解できるものであった。それまでの仏教理解の試みはアジアの他地域からの資料に依拠するものであったが、ビュルヌフの『序説』の本格的な書評を最初に出した研究者によれば、それらは成功したためしが無かった。『アジア協会ベンガル支部紀要』(1845)に掲載された書評において、エドゥアルド・レール (Eduard Rœr, 1805-1866) は、ヨーロッパ人の仏教に関する知識について概観した。その中で、ヨーロッパにおける最初の仏教理解は「二次資料」すなわち、中国語、ビルマ語、モンゴル語の書物に由来していることを指摘し、次のように述べた。「我々と仏教との出会いは、研究への興味をかき立てるようなものとはかけ離れていた。突飛な寓話、明らかな歴史的事実、哲学的、宗教的教説の混合物はまったく奇怪なもので、解明の糸口さえ見出せそうになかった」<sup>5</sup>。しかし、ビュルヌフは、インドの資料、すなわちサンスクリットに依拠したのである。

### サンスクリット化

ビュルヌフが『序説』を出版した時に、ヨーロッパにおけるサンスクリット熱は、数十年前からの盛り上がりを保っていた。そのきっかけの一つは、1876年2月2日、カルカッタでウィリアム・ジョーンズ卿がアジア協会ベンガル支部に向けて行なった宣言であった。

サンスクリットは、その古さがどれほどのものであるにせよ、驚くべき構造を持っています。ギリシャ語よりも完全であり、ラテン語よりも豊かであり、そしてそのどちらよりも素晴らしく洗練されています。しかも、動詞の語根も、文法の形式も、偶然の産物とはとても思えないほど、どちらにもきわめてよく似ています。あまりによく似ているので、いかなる言語学者であれ、これら三つの言語を吟味すれば、それらがある源泉を共有していることを信じないわけにはいかないでしょう。その源泉は、おそらくもう存在しないでしょうが<sup>6</sup>。

1814年、パリでヨーロッパ初のサンスクリット研究の講座が設置された。その最初の担当教授であったシェジーは1832年のコレラの流行で逝去した。後任となったのがビュルヌフで、アヴェスタ研究を続けながら、数多くのヒンドゥー語文献の編集と翻訳に取り組んだ。当時の主立った研究者達は仏教がインド起源であることについては一致していたが、彼らはインドの仏教文献を入手できず、利用できたのは仏教がバラモンによって追いやら

<sup>5</sup> Eduard Roer, "Review of Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien," in *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 14:2 (1845), p. 783.

<sup>6</sup> William Jones, "Third Anniversary Discourse, Delivered 2nd February, 1786 by the President," in *Asiatic Researches; or Transactions of the Society Instituted in Bengal; for Inquiring into the History and Antiquities, the Arts, Sciences, and Literature of Asia*, vol. 1 (1799), pp. 422-423. This is the London reprint of the original Calcutta edition.

れた先だと信じられていた国々（中国、日本、タタール、チベット、セイロン、アヴァ、ペグー、シヤム）の文献であった。1837年にホジソンの送った文献がパリに到着すると、ビュルヌフは仏教のストラ（経典）とシャーストラ（論書）をサンスクリットで読み始めた。『序説』第1章で、ビュルヌフは仏教のテキストをもともと書かれた言語で読むことの重要性について大きくページを割いて論じている。そこではたとえば、サンスクリットのテキストがチベット語から翻訳される時に、どのようなニュアンスや意味が失われてしまうのかが示されている。ビュルヌフの議論には説得力があり、サンスクリットで遺されている仏教文献が比較的乏しいにもかかわらず、サンスクリットは仏教研究における共通言語となっていく。

ビュルヌフは単にサンスクリットに打ち込んだのではなかった。彼は良質なサンスクリットに精力を注いだ。彼は「単純なストラ simple sutras」と「発達したストラ developed sutras」を区別したが、その鍵となる基準がサンスクリットの質であった。単純なストラは、良質なサンスクリットで書かれた比較的短い韻文であり、ビュルヌフはこれが仏陀によるオリジナルの教説を表現していると考えた（ビュルヌフはこの良質なサンスクリットを、ディヴィヤ・アヴァダーナ [Divyāvadāna]<sup>7</sup>やアヴァダーナ=シャタカ [Avadāśataka] のようなテキストの中に見出した）。発達したストラとは今日では大乘経典 (Mahāyāna sūtras) と呼ばれているものだが、そのサンスクリット、とりわけタントラのサンスクリット、中でも韻文を、ビュルヌフは粗野なものであると考え、サンスクリットにあまり通じていない僧によって書かれたものであると結論づけた。このことは、それらが仏陀から時間的に、ことによると空間的にも、遠いところで書かれたことを示すとビュルヌフは考えた。これらの作品は仏陀の死後長い時を経てから書かれたに違いなく、さらには仏教がインドから駆逐され、書き手達がサンスクリット文法の適切な教育が受けられなくなった時期に書かれたということさえあるかもしれない。まず純粋な起源があり、そこから遠ざかれば遠ざかるほど衰退が不可避となるというこのような考え方は、仏陀と彼の教説についてのヨーロッパの表象において重要な役割を演じることになる。

## テキスト化

ビュルヌフ以前には、仏教についてのヨーロッパ人の知識は、いわば「フィールド」から、すなわち、仏教国に暮らすヨーロッパ人からもたらされたものであった。彼らの情報はたいてい、地元民との会話から得られたものであったようである。たとえばエンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) のような人物が想起される。彼は、出島で日本人助手にオランダ語会話を教えていた。ヨーロッパ人が読むものがあるとしたら、それは特に彼らのために準備された要約文であることが多かった。たとえば、イエズス会宣教師のためにキリスト教改宗者が中国語で書いた仏教の説明のようなものである。まれであるが重要なケースでは、ヨーロッパ人が古典時代の仏教徒の言語でテキストを読めるようになって、学識豊かな僧とともに緊密に協力しながら、その意味の解明に努めた。そ

<sup>7</sup> 【訳注】10世紀頃の仏教説話集。



のような最初の例は、おそらくラサにおけるイッポリト・デシデリ (Ippolito Desideri, 1684-1733) であった。後にイエズス会が弾圧されたため、彼の業績は20世紀まで日の目を見なかった。ビュルヌフの『序説』が刊行されるまでの数十年間でいえば、トランシルヴァニアの旅行家アレキサンダー・チョーマ・ド・ケレス (Alexander Csoma de Koros, 1784-1842) がチベットのラマ僧とともにラダックで西藏大蔵経 (the Tibetan bka'gyur) を研究していたし、オランダ系モラヴィア人宣教師だったイザーク・ヤーコブ・シュミット (Isaak Jakob Schmidt, 1779-1847) はカルムイク<sup>8</sup>で僧侶の助けを借りて金剛経をチベット語からドイツ語に訳していた。そして、イギリスの植民地官僚だったジョージ・ターナー (George Turnour, 1799-1843) は、スリランカで上座部仏教の長老とともにマハーワンサ (Mahāvamsa)<sup>9</sup>を読んでいて、明らかに、いずれのケースにおいても、これらの学者達は学識ある仏教徒の助けなしには読んでいた書物の解説を進めることができなかったであろう。彼らの支援に対してはたいい謝辞が捧げられている。

ビュルヌフとともにすべてが変わった。彼がフランスを離れたのは生涯に二度、ドイツとイングランドに一度ずつの研究旅行のみであった。ビュルヌフは仏教徒と会ったことはなかった。彼のアプローチは送られてきたテキストを読むことであった。該博なサンスクリットの知識を持っていたのでそれを読むのはお手の物であり、そして、意味の解説を試みた。彼の方法はテキストを別のテキストと比較することであり、特定の用語の意味を仏教とヒンドゥーの諸テキストを用いて追跡した。ビュルヌフは当時の考古学と碑文研究に依拠したが、その中にはプリンセプのような在インド英国人研究者による、インド仏教の「記念碑 (monuments)」と彼が呼んだものについての研究も含まれていた。ビュルヌフはこれが仏教研究への新しいアプローチであると理解していたが、それは実際その通りであった。ビュルヌフは自身の訳した法華経をブライアン・ホジソンに捧げ、彼を「テキストと碑文を用いての真の仏教研究の創始者」と呼んだ。もっとも、その後数十年の時を経て、その称号は明らかにビュルヌフ自身に、よりふさわしいものとなっている。

ビュルヌフは次の世紀の仏教研究のモデルを提供することになる。このように仏教、とりわけインド仏教がテキスト化されたのは、一つには当時のインドに学識のある仏教僧がいなかったためである。またもう一つには、ビュルヌフの影響の下、もっとも大きな影響力を持っていたヨーロッパの仏教研究の焦点が、インド、それも「古典期のインド (classical India)」へと向かっていったという事実のためでもある。これが「真の仏教研究」を代表するのかどうかは、検討に値する問いである。

## 人間化

ビュルヌフの『序説』における最も重要な記述は、巻の中ほどの脚注に見出される。「この巻の全体は、仏教の純粋に人間的な性格を浮かび上がらせることに捧げられている」<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 【訳注】 カスピ海の北西に位置するロシア連邦の自治共和国。モンゴル系住民によってチベット仏教が信仰されている。

<sup>9</sup> 【訳注】 スリランカの歴史を記録したパーリ語叙事詩。1837年にターナーが英訳。

<sup>10</sup> Eugène Burnouf, *Introduction to the History of Indian Buddhism*, trans. by Katia Buffetrille and Don-

ヨーロッパと仏教の出会いの歴史を概観すると、その最初の段階で、Xaca、Fo、Sommonacodom などの名前で知られているアジアの偶像が時に神として、時にデーモンとして、時に人間として表象されているという事実気付く。いずれにせよ、ヨーロッパの資料に見られる彼は、たいていきわめて否定的に描かれていた。引用できるような例は何十もあるが、17世紀最大の学者の一人に数えられるアタナシウス・キルヒャー（Athanasius Kircher, 1601-1680）による『支那図説』に次のような一節がある。

釈迦は誕生したが、母を殺したと言われる最初の者となった。次に彼は片手で天を、もう一方の手で地を指さしながら、自分以外には天にも地にも聖なる者は存在しないと言った。続いて彼は山に隠棲し、悪魔の助けを借りてこの不気味な偶像崇拜を興した。後に彼はこの伝染性のドグマを東洋全体に蔓延させたのである<sup>11</sup>。

18世紀までに、仏陀が人間であったことが一般に認知されるようになった。しかし、上述の通り、彼がインド出身であるというところまでは正しく結論されていたものの、正確なところは明らかでなかった。彼の生涯と死の正確な時期についての問いは残されていた（今日なお残っているが）。一次資料を用いて仏陀の生涯の時期を正確に調べようとした最初の研究者は、スリランカの大歴史叙事詩であるマハーワンサの大部分を翻訳したジョージ・ターナーであった。しかしながら、彼の仏教文献への関心は、そこに含まれている歴史的情報がどんなものであれ、主として仏陀の死の正確な時期を確定することであった。それさえわかれば、それに続く数世紀に何度か行われた仏典結集の時期が決まってくるのであった。実際、ターナーは仏陀自身にはほとんど用がなかったように見える。ターナーにとって、仏陀は「素晴らしきベテン師」であり、仏教徒は軽信と迷信の徒であった。ターナーにとって仏陀が重要であったのは、彼が歴史上の人物であり、伝記上の歴史的事実と神話のフィクションを峻別することで死の時期を特定し得るからであった<sup>12</sup>。

仏陀の歴史性はビュルヌフにとってもまた決定的であった。彼は『序説』の最終章で論じている。インドは仏陀の——すなわち自ら神たろうとはせず、そしてビュルヌフによれば、弟子達も神格化しなかった人間の——教えとともに、神話の世界から歩みだし、歴史の領域へと入っていったのである。これは、19世紀前半においては思い切った主張であった。当時、インドには歴史がないという論者が多かったのである。

ビュルヌフの仏陀観は他の点でも影響力が大きかった。彼以前のほとんどすべてのヨーロッパ人の著者とは異なり、ビュルヌフは心から仏陀に感服していた。その理由は、神秘主義や形而上学の罫にとらわれることなく単純な倫理を説いたこと、耳を傾けるすべての者が自分のものとできるような教えを説いたこと、腐敗したバラモン教の因襲に勇気をもって立ち向かったこと、などである。ビュルヌフがどのようにして、またどのテキスト

ald S. Lopez, Jr. (Chicago: The University of Chicago Press, 2009), p. 285, note 90.

<sup>11</sup> Athanasius Kircher, *China Illustrata*, trans. by Charles D. Van Tuyl (Bloomington: Indiana University Research Institute, 1987), pp. 141-142.

<sup>12</sup> George Turnour, "An Examination of the Pali Buddhistical Annals, no. 4," in *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, vol. 8 (December 1838), pp. 991-992.



に基づいて(彼にはテキスト以外の材料はなかったので)こうした見方を身につけるに至ったのかは、さらなる研究に値するテーマではある。しかし、簡潔に指摘しておくならば、ビュルヌフもまた、現代の我々すべてと同じく時代の制約を受けており、人権思想が空気に充ちていたパリの、反教権的な傾向の強い知的伝統の中に育ったのである。彼は自分の学生であったフリードリッヒ・マックス・ミュラーに語ったという。「私はイエズス会が嫌いだ」。

## 結論

このシンポジウムの中心問題——すなわちモダニティと仏教、その歴史という問題——に向かうにあたって、その歴史にとって最重要の学問的業績は、ビュルヌフの1844年の名著『インド仏教史序説』なのではないかと主張しておきたい。今日ではほとんど言及されることもなく、滅多に読まれもしないが、その影響力は強かった。〈インド化〉によって、『序説』は仏教に起源の地位を与えた。それは、ギリシャやイタリアでそうであったように、テキストと碑文のみを遺して古代文明が滅びた唯一無二の誕生の地という地位であった。〈サンスクリット化〉によって、『序説』は仏教に固有の古典的言語を与えた。それは死語であり、仏教を現代にまで伝えてきた中国語、日本語、朝鮮語、チベット語とは異なって、もともとギリシャ語、ラテン語と関係していた言語であった。〈テキスト化〉によって、『序説』は仏教に古代の正典を与え、その正典を仏教の起源の理解を試みる研究固有の場とした。〈人間化〉によって、『序説』は古代ギリシャ・ローマへと至るもう一つの経路を用意した。仏陀を偶像、さらには神々のパンテオンではなく、哲人達のパンテオンに加えたのである。ビュルヌフが提示した仏陀像は、ヨーロッパ、アメリカだけでなく、アジアにおいても巨大な影響力をふるうことになった。ビュルヌフが共感をこめて描き出したのは、自らの努力によって偉大な英知を身につけ、制度宗教の腐敗に立ち向かった慈悲深い人間の肖像であった。この姿がきわめて強い影響力を持ち、結果として「科学的仏陀」とでも呼び得るようなものを生み出した。これら四つの事柄——インド化、サンスクリット化、テキスト化、人間化——は、仏教を古代に位置づけ、そしてこのことが同時に仏教を近代的にもしているのである。

このシンポジウムの中心問題——モダニティと仏教——について考える時、我々はウージェーヌ・ビュルヌフの非凡な業績に最大限の敬意を捧げなければならない。もっとも、その敬意は一方で、なにかが間違っているのではないかというある種の不安も伴う。なにがおかしいのか。あえて名前をつけるとするならば、それは植民地主義であろう。ビュルヌフ自身は植民地事業に関わらなかったが、彼が東インド会社の職員であったホジソンからテキストを受け取っていたことを想起しなければならない。植民地主義の影響の評価というきりがないように見える課題と向かい合いながら、我々は作り出された知識のすべてに対して意義を認めなければならない。しかしながら、その過程で、仏教についての権威者の声、またあるいくつかの意味では仏陀自身の声が、ヨーロッパの言語で語りだした。そこで我々は、キリスト教徒の流儀で運命的な年の前後で時間を区切り、1844年こそ、すべてが変化した年であると見なしてもよいだろう。この場合は、画期的な年に続く時代は単純な贖いの時代ではない。それは喪失の時代でもある。